

* * * *

カキノキ目 Ebenales は大きな科としてアカツク科 Sapotaceae, カキノキ科 Ebenaceae, エゴノキ科 Styracaceae, ハイノキ科 Symplocaceae の4科があり、また Sarcospermataceae, Lissocarpaceae, Hoplestigmataceae の、それぞれマレーシア、南アメリカ、アフリカの小地域にのみ分布する科がある。これに属する種類の大部分は熱帯、亜熱帯に分布していて、生の材料を入手することが困難なため、胚発生の研究はきわめて不完全である。日本にはエゴノキ、サワフタギ、カキノキなど身近に材料があり、アカツクは小笠原から不充分ながら材料を入手したので、胚発生を中心に各科の相互関係、カキノキ目の系統関係を明らかにしたいと思う。

エゴノキ *Styrax japonicus* の胚珠は倒生で2枚の珠皮をもつ。内珠皮は胚珠形成の初期によく発達しているが、2核胚囊期の頃から退化しはじめ、胚囊が成熟する頃は細胞が萎縮して、よく発達した外珠皮に包まれてしまう。胚囊のできかたは普通型である。胚乳形成は cellular type で細胞分裂のしかたはかなり不規則である。胚形成は m 層から幼根の原皮層と原中心柱との起源細胞が分化する。この様式は Chenopodiad type とよばれる分化のしかたにはほぼ一致し、ツツジ目の胚形成とかなり類似する。成熟した種子は堅い石細胞からなる数層の表皮をもつ。種子には多量の胚乳があるが澱粉をもたず油を含むなどの特徴がある。

○硫黄島に帰化したイネ科植物キヌゲガヤ (津山 尚) Takasi TUYAMA: *Tricholaena repens*, a grass naturalized on Iwo-jima (Volcano group).

1969年7月、中硫黄島に上陸して戦前、戦後の植生の変化を観察して来た。この島の元山とパイプ山をつなぐ平坦地は20数年を経て大きく隆起し、地熱も一般に低下したためか、千鳥ヶ浜と称せられた平坦地は大部分がイネ科でおおわれていたのには驚いた。この中で一番目立ったのが *Tricholaena repens* で高さは50—70 cm位、小穂にはじめ著しい紅紫色の毛があり、これが後に白色の絹毛状の毛に変る。アフリカ Natal 原産であるが、多分ハワイ島を経由してこの地に繁殖をはじめたもので、典型的な戦時移入植物と考えられる。ハワイにも多少見られるが、硫黄島の乾燥した地帯に適したものか、著しく繁殖している。小穂の毛の状態からキヌゲガヤと呼称することとしたい。ハワイでは乾燥花としても用いられる由であるが、今のところ小笠原島には入っていない。いづれ日本の暖地にも侵入して来るであろう。附図を参照されたい。或は沖縄にも既に入っているのではないかと思う。

小穂は非常に多毛で、解剖しないでは、構造が全く分らない。小穂の最下部には苞(苞穎)があるが、非常に小形で、殆んど毛のみからなり、数花の例では一個しか発見



Fig. 1. 中硫黄島の草原のキヌゲガヤ, *Tricholaena repens* naturalized in Iwo-jima (photo in Jul 1968).

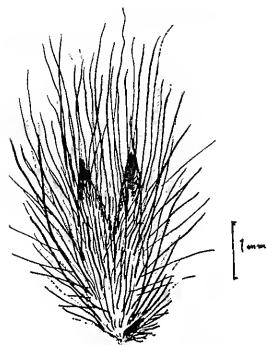


Fig. 2. キヌゲガヤの小穂, 右下方が苞穎. Spikelet of *Tricholaena repens*.

できなかった。護穎は2個が並立して見え（共に先にノゲを有するが背面のより長い毛にかくれて見難い），同型であるが，下方のものには薄膜質の不穏の護穎と殆んど同長かつ有毛の内穎を有し，上方のものには護穎の半長で鈍頭無毛淡黄色の穏性の内穎を有する。しかし稀に2個の護穎がともに穏性のものもあった。この場合穏性とは雌・雄蕊を両方そなえているものである。

本小文をまとめた後に東大の山崎敬氏から，台湾に移入された本植物が既に台北の許建昌氏によって学名が同定されている由の知らせを受けた。

（お茶の水女子大学）